

主催者挨拶

名古屋大学農学国際教育協力研究センター長
山内 章

(山内) 皆さん、こんにちは。第9回のオープンフォーラムの開催に当たりまして、主催者を代表して一言ごあいさつ申し上げます。農学国際教育協力研究センター（略称：農国センター）のセンター長を務めております山内と申します。

まず、本日は大変お忙しい中、基調講演をいただきます農研機構の作物研究所の岩永先生をはじめとする話題提供者の皆さま、それから来賓としまして、名古屋大学の副総長で、研究国際交流担当理事の宮田先生、そして参加者の皆さま、ご参加いただきまして大変ありがとうございます。前もってお礼を申し上げたいと思います。

さて、昨今の国内情勢の中で、農業、食糧が非常に高い社会的な関心を集めています。国の政策に目を移しますと、本年5月に開催された TICADIV（第4回アフリカ開発会議）では、アフリカ、食糧が主要なトピックとされましたし、横浜行動計画では、農村の農業開発の中で、食糧増産および農業生産性の向上が目標と定められています。わが国は5年間でアフリカへの ODA を倍増することをコミットしています。また、言い出したご本人はもうお辞めになりましたが、洞爺湖のサミットでは食糧、アフリカがキーワードと主要なトピックになっています。

一方、文部科学省では、2006年に第3次国際教育協力懇談会を組織して、国際教育協力における大学の知の貢献を求めて、大学の国際教育協力に一層の参画をするための基盤づくりを必要とするという提言を出しています。

また、もうすでに1カ月になりますが、今月の初めには、わが国の国際協力における歴史的なイベントとして、JICA と JBIC が一緒になられて、新 JICA が発足したことも非常に重要なトピックだと認識しています。このように、われわれの農業を取り巻く情勢、それから国の政策、社会からの要請というところで、社会貢献の中で大学らしい、あるいは大学にしかできない国際協力に大いに貢献することが求められていると認識しています。

しかし一方で、大学の国際協力の体制は十分に整備されていないというわれわれの認識がありまして、昨年度、第8回のオープンフォーラムは、大学と国際協力機関との組織連携というテーマで開催しています。そのときには、個々の非常に優れた業績・成果の取り組みが紹介されましたが、それはあくまでも個々の大学、あるいは教員個人の取り組みであって、それぞれが経験、成果、あるいは問題を共有して、日本全体として組織の力にしていくことが今後の課題であることが浮かび上がってきました。そこで、それを解決するために、私たち農国センターは農学知的支援ネットワークの構築を呼び掛けました。今日は、それに賛同してくださる、あるいは関心を示してくださる大学の皆さまに集まいただきました。さらには、文部科学省、新 JICA、JIRCAS（国際農林水産業研究センター）から大学の連携・協力をご担当されている責任者の方々にもお集まりいただきまして、これから大学が一層、国際協力事業に参画するための課題や方策について議論するために、今回のオープンフォーラムを企画するに至りました。

皆さま方におかれましては、大変お忙しいということは重々承知の上で参加の要請をいたしましたところ、ご快諾いただきまして大変ありがとうございます。重ねてお礼を申し上げ

ます。

農国センターは、農学領域の開発問題を実践的に解決する人づくりをリードする拠点を
目指して、文部科学省のご指導の下に 1999 年に名古屋大学に設置されて、今年で 10 年目
になります。設立以来、農学分野の国際教育協力に関係する国内外の大学、あるいは国際
協力機関との連携強化をセンターの主要なミッションとして活動をしてきました。このフ
ォーラムもその一環です。大学の多くの教員は、研究でも一流の成果を挙げたい、それか
ら非常に優秀な学生も育てたい。そして、国際協力の場面でも貢献したいと考えています。
特に国際教育協力事業は、個々の教員が個別に対応していたときから、組織での対応とし
て取り組むようになってきて、ますますネットワークの重要性が増してきていると認識し
ています。このネットワークは、それを積極的に作って、使って行ってこそ、その機能を
ますます発揮するものだとわれわれは認識しています。今日から 2 日間にわたって、率直
な意見交換、今後の在るべき方向についての実質的な議論を展開する場にこのフォーラム
がなれば、主催者としてもこれ以上の喜びはございません。

今日から 2 日間ですが、熱心なご議論をしていただければと思います。私も一所懸命勉強
させていただきたいと思います。これをもって私のあいさつとさせていただきます。どう
もありがとうございました。